

葦

大阪発達総合療育センター機関紙
第24号

社会福祉法人 愛徳福祉会

大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center

保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院

特集:フェニックス開設10周年記念



■年頭挨拶

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長

梶浦 一郎



平成29年の年頭にあって一言挨拶を申し上げます。毎年申し上げておりますが、1月1日というのは年の始めとして何故か清々しい新たな気持ちになります。皆様
の正月休みはいかがでしたでしょうか？

昨年はフェニックス開設10周年の記念式典を行いました。旧聖母整肢園から南大阪療育園と30年以上継続してきましたが、その間に社会情勢は大きく変わりそれまでの利用児は者へと成長し、周産期医療の進歩によって重症児の比率が大きくなるなど、この変化に対応していく必要に迫られました。重症児を守る会の強いご要望と大阪府、市の力強い御支援、それに近隣の皆様のご理解などの結果として、施設の全面改築が実現し、2007年に大阪発達総合療育センターとして発足しました。重症心身障害児者施設「フェニックス」、南大阪小児リハビリテーション病院「わかば」、その他幼児のための「ふたば」、成人のための「なでしこ」、訪問看護ステーション「めぐみ」などを網羅する複合施設となりました。これは長い間の職員の皆様の努力と研鑽の積み重ねの結果と感謝申し上げます。

一方世界を見渡しますと英国のEU離脱から始まり、米国の新しい大統領誕生という激しい流れが起きています。これはそれまであまりにも建前と期待外れが強く長く続いたので、それに対して大衆が本音を期待いただいた結果と思えます。(大阪ではもっと前から始まっています。)あまり各国が本音ばかりで動くと言いますが、今までがあまりにもきれいなごときばかりで行動が地についていなかった反動が起きていると思います。人類の英知に期待したいものです。

私達の医療行為、福祉活動もエビデンスがやかましく言われ、単なる思いだけでは認められなくなっています。職員全てが技術の向上はもとより、合理的な組織の強化によるスマートな活動が求められています。今年には世界の潮流に合わせた本音による新たな挑戦をお願い致します。

■特集に寄せて

大阪発達総合療育センター センター長

鈴木 恒彦



2017年を迎え、明けましておめでとうございます。3年後に当センターは、旧聖母整肢園から数えて50周年を迎えますが、その前に、昨年は2007年の改築とともに併設された「フェニックス」の創設10周年を迎えました。設立時の初代園長児玉和夫先生をはじめ、当初から関わりの深かった職員の皆様、ご指導・ご協力いただいた所轄官庁の大阪市、近畿圏の多くの関係施設長の方々をお迎えして10周年記念式典が11月12日に盛大に行われました。今でこそ船戸副センター長を中心に先進的取り組みが進むフェニックスですが、当初のご苦労は大変だったようです。

以前ご紹介し、一昨年から当センターで開催されるようになった近代ボバース概念(CBC)に基づく8週間の脳性麻痺講習会は、森ノ宮病院と分担で開催され、当センターは後半4週間を担当しました。受講生の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、大変中身の濃い講習会でした。例年恒例の院内学会は、年末の12月28日分園の職員を含めた大勢の参加を得て開催されました。熱のこもった質の高い発表と質疑応答がみられ、理事長が目指す学術的志向が年々根付きつつある感がします。

今年も輝ける年になるように皆で力を合わせましょう。



フェニックス開設の頃

フェニックス初代園長
現堺市立重症心身障害者(児)支援センター ヘルデさかい センター長

児玉 和夫



フェニックス開設からもう10年が過ぎました。開設に関わった身として感慨深いものがあります。

梶浦先生から、南大阪療育園に重症心身障害児施設を作る、同時に肢体と重心を合わせてセンターとしたい、というお話を受けたのは2004年春でした。当時私は東京の心身障害児総合医療療育センターの副所長という身でしたが、定年は過ぎ、次の活動の場を探していました。大阪は住んだことはありませんでしたが、ボバース法の講師で呼んでいただき、何度も訪れた地なので、これもご縁かと思ってお受けすることにしました。

2005年4月に就任しましたが、肩書きは社会福祉法人愛徳福祉会 重症心身障害児施設開設準備委員長でした。以後開設まで多くのことに取り組むことになります。

●まず驚いたのは、開設のために関係者の検討会などで示されたご家族の施設に対する厳しい目です。今までの施設のようにしてくれるな、という声が多く出ていました。施設は家や地域から離れて隔離し、人間的とは言えない管理をする場、というイメージがあったのでしょうか。「施設の役割は一人一人の生活を支援することです」とご説明したのですが、入所への抵抗感はかなり根強く、60名の入所定員が埋まったのは予定の2年間を過ぎてからです。病院の小児科の先生の中にも、施設に送るのは忍びない、といったお声もいただきました。実際に施設に来ていただき、看護の状況、展開されている他職種による療育などを見ていただきようやく納得していただいた、といったことを何度も経験しました。民間施設だからということで、大阪市の広報に入所者募集を載せることも許されず、本当につらい思いをしました。

●入所の選考は公平に行うことを基本に、ご本人の障害の重さ、医療度、ご家庭状況など全ての項目で問題が大きい方を優先することにしました。情報を正確にするため応募の方のご家庭や、入院中の病院あるいは入所中の施設に出向いてお会いしました。ただしご希望者が少なかったため、多少元気な方もお受けしています。

●60床の入所に対して20床の短期入所というのも、それまでの全国の施設の常識からは考えられない数でした(通常は定床の5%程度)。この数はもう一つ別の病棟を作るのに等しく、とても入所機能の一部を割いてというレベルではありません。マネージメントもスタッフの配置も大変ですし、在宅生活と同じレベルを求めるとご家族からは苦情もたくさん受けることになります。超重症の受け入れも含めよくやってこれたと思っています。

●個室の数の多さでは日本で一番でしょう。今でも超重症の方は大きな部屋に集めて管理しなければいけない、という考えの施設が多く、たくさんの個室にいる超重症の方の状況をモニターで把握する、ということは難しく思っていました。やれば出来るということを実感しました。感染予防のためにも、短期

受け入れでも個室の意義はこれから広まるでしょう。

●スタッフ集めは大変でした。医師や看護師、療育関係職員はもちろんですが、一時は薬剤師がゼロになり、当時いた小児科医が薬局にこもって調剤をしていたこともあります。見学に来られた薬剤師さんに一度は断られましたが、長い手紙を書いて期待する気持ちをお伝えし、ようやく来ていただきました。前後してレントゲンも検査も入れ替わりました。

●資金集めは梶浦先生も相当苦労されておられました。経済界にはもちろん、政治家塩川正二郎氏に後援会会長を依頼したり、永六輔さんにも支援をお願いしておられますが、その多くは実りませんでした。私自身も支援を求めてロータリークラブなどの例会で話をさせていただきました。支える会も絵画展や演奏会などでバックアップしてくれましたが、それでも多額の借入金金に担っての出発となりました。出費を抑えるといっても、これからの重症心身障害児医療には不可欠と判断してCTスキャンや透視レントゲンなどを入れることにしましたが、機器の勉強や市場調査などを行い、日立、東芝、島津といったメーカーと連日交渉を繰り返しました。交渉は徹底してすべきです。このことを改めて思いました。

●フェニックスという名前は私の発案だと思いますが、梶浦先生のお気持ちもあったと思います。〇〇福祉園といった定番的な名前は避けようと思っていました。サルビアやソレイユといった施設もありましたが、浮かんだのがフェニックスです。梶浦先生がプロに頼んでロゴマークができ、それがセンターのマークともなりました。

こうして出発したフェニックスですが、今では全国の重症心身障害児関係施設の中でも、施設生活・在宅援助も含め、注目される存在になっています。これは私の後の船戸先生のご努力もあってのことですが、これからも一層地域で頼られる存在になっていって下さい。



フェニックスの歴史を辿る

大阪発達総合療育センター 副センター長 船戸 正久



1. 重症心身障害者援護施設のあり方検討委員会の提言(大浦敏明会長)

この検討委員会は、大阪市からの委託を受け1998年度から「重度心身障害者支援施設のあり方」について検討を行い、重症心身障害者とその家族の置かれている厳しい現状について明らかにすると共に、「生活感のある入所施設」、「在宅生活を維持継続」できる支援機能を有することが必要と提言しました。1999年度には、「地域生活支援」、「在宅生活支援」について検討。さらに2000年度は、整備構想策定部会を設置し、「本人支援」、「家族支援」として施設支援機能が十分に発揮できるよう、施設設計で配慮すべき事項について検討しました。こうした提言を基に大阪市の委託を受けて2006年度重症心身障害児入所施設「フェニックス」が開設されました。

2. フェニックスができるまでの思い出

フェニックス初代園長の児玉和夫先生は、南大阪療育園創立40周年記念誌にフェニックスができるまでとして次の思い出を書いています。まず驚いたこととして、1) 重症心身

障害児施設のイメージが確定していなかったこと、2) 個室が非常に多かったこと、3) 入所希望児・者が不足したこと、4) ショートステイ(短期入所)が20床分とは?(通常は入所ベッドの5%程度で4床が適当)などでした。実際に運営する試みとして、5) 各方面から支援をお願いする働き、6) 医療機器をどう揃えるか、7) もっと大事なのは人の問題、8) 聖母整肢園・南大阪療育園を引き継ぐフェニックスの活動など大変苦労をされました。

3. 大阪発達総合療育センターの歴史

1970年に肢体不自由児治療施設「聖母整肢園」として開設されました。1982年には「南大阪療育園」に改名。2006年に重症心身障害児入所施設「フェニックス」を新たに開設し、全体施設を「大阪発達総合療育センター」と命名。その際センターの理念を「私たちは障がいを持つ人々が地域においても安心して生活できるように総合的支援を実践いたします」と決めました。この理念を基に、2010年に訪問看護ステーション「めぐみ」開設、2012年には医療機関を「南大阪小児リハビリテーション病院」に改名すると同時に、在宅療養支援病院を取得。さらに2014年には訪問診療科を開設し、相談支援事業所「いぶき」、そして訪問介護ステーション「めぐみ」も開設し、地域における重症心身障害児者の在宅生活を積極的に支援する体制を整えました。現在医療型障害児入所施設としての構成は、主に肢体不自由児棟「わかば」40床(内ショートステイ3床)、主に重症心身障害児者棟「フェニックス」80床(内ショートステイ17床)です。

4. フェニックスの活動

現在「あり方検討委員会」の提言にあるように、「生活感のある入所施設」だけでなく、「在宅生活を維持継続」ができる支援、「地域生活支援」、「在宅生活支援」を目指しています。「本人支援」、「家族支援」を目的に季節に応じた様々なイベントに加え、「Make a wish(夢をかなえよう)プロジェクト」「お家へ帰ろうディ」など、本人と家族ができるだけ楽しい時を過ごせる支援なども行っています。2011年度からは在宅移行支援プログラムを作成し、NICU(新生児集中治療室)などで退院が困難な長期入院児を対象に当センターの多職種による生活モデルの支援を行っています。実際75%の重症児者の方々が在宅移行に成功し、地域の福祉支援にも繋がり大変喜ばれています。

今後医療的ケアが必要な重症児者の方々のトータルケアを病院や地域と連携してどのように支援するかが、フェニックスの新たな課題となっています。最後に今までフェニックスの様々な活動に協力して下さった看護部始め療育部・リハビリ部・医療相談室など各スタッフに深謝いたします。



感謝状 被贈呈者

フェニックスへの思い
～10年を振り返って～

医務部 小児科 竹本 潔



2006年4月1日（土）、38人の新入職員が完成したばかりの5階ホールで梶浦理事長から辞令を交付されました。私もその中の1人で、参列していた職員の多くは、これからオープンする重症心身障害児施設での仕事に期待や不安（不安の方が大きかった!？）を抱いていたと思います。

いざ開設してみると、当初は入所されている人より職員の方が多く、朝の申し送りが終われば、各々ホームセンターに出向いて、不足していた物品（椅子や文房具など）を買い出しに行ったり、廊下の壁紙に飾り付けをしたりする日もありました。私も最初の2年間は、随分と当直をした覚えがあります。1年遅れでオープンした4階病棟は当初辞職する看護師が後を絶たず、やり繰りはさぞかし大変だったことと当時のご苦労が偲ばれます。（今も変わらず大変だと思いますが・・・）

フェニックスといえば夏祭りとクリスマス会が2大イベントですが、第1回クリスマス会での3F職員寸劇の「西遊記」は、記憶に残る名演技でした。衣装やメイクも念入りで、特に現3F病棟棟長井ノ上さん扮する三蔵法師は、TVで演じた往年の夏目雅子さんと同じお姿でした。（わかっていた人だいたい少ないと思います・・・）

フェニックスは、みなさまの大変なご苦労の積み重ねにより、地域に無くてはならない療育施設となりました。フェニックスの最も特筆すべき点は、多職種（医師（小児科・整形外科・歯科）、看護師、介護福祉士、保育士、PT、OT、ST、MSW（社会福祉士）、臨床工学士、臨床心理士、HPS、栄養士、歯科衛生士、病棟クラーク事務；本場に多（!）職種です!）がお互いを尊重しながら、ご利用者のために同じ方向を向いて、協働して支援していることにあります。

これからも、ご利用者と職員、みんなが家族のように笑顔で過ごせる施設であり続けたいと願っています。

フェニックスへの思い

3階病棟 看護師

井ノ上 智世



フェニックス病棟が開設して10年が経過しました。初めて入所者様、家族様とお会いした日のことを昨日のように覚えています。

フェニックス病棟への期待や不安…様々な思いを抱えながら入所された方の生活をどのように支援すれば良いのか考える毎日でした。それらを教えて下さったのは、一緒に過ごさせて頂いた入所者様と家族様であったと思います。入所者様が誕生してから今まで歩いてこられた人生を語り

合いながら、好きなこと、楽しいこと、得意なこと、苦しいこと、また、命の尊さやその人らしく生活する大切さをたくさん教えて頂きました。

これからも、入所者様の健康を守りその人らしい生活を過ごせるように支援することを基軸として、乳幼児から選齢を迎えた様々な年代の入所者様、家族様とともに一日一日を大切に歩んでいきたいと考えています。

最後になりますが、フェニックス10周年記念式典で感謝状を頂きましたこと深く感謝致します。フェニックス病棟開設20年30年に向けてさらにステップアップできるよう、スタッフ一同邁進していきます。引き続きご指導よろしくお願い致します。

フェニックスへの思い

地域医療連携部 ヘルパーステーション めぐみ

宮崎 俊也



この度ヘルパーステーション勤務という立場でありながら、フェニックス10周年感謝状を頂きました事、大変恐縮かつ感謝の気持ちで一杯です。

フェニックス勤務当時は入所者様・ご家族が安心し、楽しくイキイキと毎日過ごせる事が目標でした。今、思い起こすと日々の活動や季節の行事など、皆様に楽しんで頂きたい一心で肩に力が入り過ぎた事も多々ありましたが、ご家族の支えにより様々な事を乗り越えられたと思っております。

現在、ヘルパーステーションより外出支援でフェニックス入所者様と関わらせていただいております。外出を楽しみにされ何時間も前から待っていてくださる方や、行きたい場所を示した先にご自宅があったりと、フェニックスに勤務していた時には、わからなかった思いに気づいた時に胸が熱くなる事があります。

ご本人の思いを理解し生活を考える事はとても難しい事ですが、ご家族・多職種と意見交換をしながら日々の生活が安心して送れるように努めていきたいと思っています。皆様の沢山の笑顔を見られる事を目標に、私自身も楽しみながらフェニックスを盛り上げていけるよう頑張っていきたいと思っています。

医務部 小児科 馬場 清

ご来賓の方々

(敬称略)

- | | |
|-----------------|------------------|
| 大阪市議会議員 | 加藤 仁子 |
| | 江川 繁 |
| | 田辺 信広 |
| | 高見 亮 |
| 大阪市福祉局 | 中島 進 (障がい者施策部長) |
| | 蔵野 和男 (障がい支援課長) |
| 大阪市健康局 | 寺澤 昭二 (在宅医療担当課長) |
| 大阪重症心身障害児者を支える会 | 寺岡 富子 (理事長) |
| フェニックス 家族の会 | 平野 健三 (会長) |
| 南田辺連合振興会 山五東町会 | 坂本 敏和 (会長) |

その他、たくさんの方々にご列席いただきました。

2016年度近代ボバース概念 小児領域8週間講習会を終えて

あさしお園
アジア小児ボバース講習会講師会議 (ABPIA) 基礎講習会インストラクター
理学療法士

西野 紀子



昨年引き続き、近代ボバース概念小児領域8週間講習会が当センターで開催されました。全国各地から集まった19名のセラピストが、2016年10月3日から11月25日まで受講されました。本講習会で、当センターの佐藤PTは最終トレーニングの合格を得て、基礎講習会インストラクターとして認定されました。須貝OTはセカンドコースとして受講し、指導者を目指すスタートにたちました。私たちセンター職員にとっては、入職してまずCBCセラピスト（近代ボバースセラピスト以前はNDTと呼称）になることが一つの目標であり、その講習会が当センターで開催されることは、全職員がその様子・雰囲気を知り、刺激を受ける好機となっています。

今回の講習会の特徴は、前半4週間が森之宮病院にて、後半4週間が当センターで開催されたことです。初めてのことでしたので内容がプログラムの流れに沿ってうまく引き継がれるよう、西野が森之宮病院に足を運び、受講参加者との関わりを持ち、前半の成果をもとに、後半の治療実習のグループ構成や指導に活かすように努めました。受講参加者からは、森之宮病院と当センターの2つの良さ

を経験できたことはメリットであった、という感想をいただきました。講習会のプログラムは昨年と同様に、紀伊シニアインストラクターが全プログラムを指導して、感覚系の発生・発育・発達/求心性操作による個性評価/多重感覚環境における姿勢フィードバック機構の発達/エラーチェックシステムによる身体図式形成過程/ボトムアップ機構とトップダウン機構による直立姿勢の発達過程/骨格筋の発生・発育・発達/質的ADLのための課題分析/先行性姿勢調整による課題遂行/即時効果を基盤とした学習目標設定/などを、講義、デモンストレーション、臨床推論、実技練習、治療実習によって受講参加者の習得が各週ごとにシステマティックに進行するように構成されています。近代ボバース概念においては、セラピスト自身が自らの身体図式を認識しプロの身体を形成することが大きな課題です。後半4週間は、脳性まひ児の個別ごとの臨床推論討議と治療技術熟練に比重がおかれています。治療実習 (A,B,C) においては、講習会で学んだ知識と技術を総動員し、A; 瘻直型 (7回)、B; アテトーゼ型 (8回)、C; 外来治療・母子入院・家庭療育・重症児など (6回)、とテーマごとにスーパーバイザーと共に、臨床推論を進めました。治療成果も確認でき、協力くださった利用者様からもとても好評でした。

ボバース概念を理解し実践するには、障がいのあるお子様とご家族の期待に対して常に考え前進し、目に見える即時効果の治療を提供することが求められます。45年もの長きにわたり、そのことに挑んでこられた紀伊シニアインストラクターの確かな技術、知識、そして粘り強く発展し続ける強い信念を学べる機会をいただけたことに心より感謝いたします。若いセラピストの育成のために、これを引き継いでいくことが我々次世代の使命であることを再認識しました。

ご協力くださったお子様方、ご家族、センターの職員の皆様に深く感謝申し上げます。

受講生からの感想

押川 龍太 (大阪発達総合療育センター 言語聴覚士)

STとして姿勢運動のことを学ぶことに大きな不安を持っていました。実際たくさん悩みましたが、それだけ課題に向き合って悩むことができる環境を用意していただけて、とてもありがたく思っています。前半、後半とで会場が違ったことで、「病院」と「療育センター」それぞれの特有の良さや知識を得ることができました。インストラクターとの関係性ができた頃に会場が変わるのはドキドキしましたが、当センターのインストラクターが、一貫して関わってくれたので、安心できました。そして、美味しい昼食のおかげで、夕方まで元気ががんばれました。

森 かおり (川崎市中央療育センター 理学療法士)

脳性まひ児の治療を行うために、必要な知識、評価、治療についてコアボバースを基礎とした最新のボバース概念を学ぶことができました。講師陣の熱意に加え、受講生のみなさんと共に学ぶことにより、理解を深めることができました。このような機会が得られたことに感謝し、地域の子どもたち、ご家族の一助となるよう今後も努力していきたいと思えます。充実した8週間を送ることができました。皆様のサポートがなければ実現できなかったと思います。本当にお世話になりました。

院内学会

最優秀賞

「NMCS後方支援における人工呼吸装着児の在宅移行事例
-サポートブックでつながる継続支援-」
看護部 梶原綾 友野博子 井ノ上智世



清水賞

「在宅移行支援利用児の入院までの調査報告」
地域医療連携部 医療相談室 近藤正子
医務部 船戸正久 竹本潔 飯島禎貴 和田浩

清水賞奨励賞

「個性性の高い排泄ケアを目指す」 療育部 川副聖治
「重度重複障がい児の親子集団慢性期呼吸リハビリテーションの評価として、主観的認識の変化を点数化した試み-COPMを用いて-」
リハビリテーション部 河中真由美 井上千絵 鶴田ゆかり
看護部 石浦光世 諏訪恵子
医療技術部臨床工学科 輪ノ内新 西岡孝洋
医務部 竹本潔

「小児急性期からの発達リハビリテーションの必要性
-在宅移行支援の経験から-」

リハビリテーション部 植野清香 今村健一 中尾美知瑠 黒澤淳二
医務部 竹本潔

優秀賞

「利用者、そして自身を守るために ~反省をふまえた私たちの災害対策~」
地域医療連携部訪問看護ステーション 熊田綾 黒川めぐみ
地域医療連携部訪問介護ステーション 皆川かほり
「病棟における口腔ケアと歯科衛生士の役割」
療育部 歯科衛生科 三好穂乃香 岡田莉歩

「小児作業療法におけるボツリヌス療法の併用について」
リハビリテーション部 須貝京子 関口佑
医務部 鈴木恒彦 美延幸保

「18年間の経営栄養から 経口摂取可能になった一例
-大阪発達総合療育センターにおけるチームアプローチ-」

あさしお診療所リハビリテーション科 南昌輝
医務部 船戸正久
看護部 牛尾実有紀
リハビリテーション部 中澤優子
ゆうなぎ園 立石篤識 中尾美知瑠



職員研修実施状況 H28年10月～H28年12月

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
平成28年10月12日(水) 17:40～18:40	教育研修部	人権研修 「子ども虐待」 ～入門編～実践編～	療育部 山口一平科長補佐	102名	5階ホール
平成28年10月28日(金) 18:00～19:00	リハ部・看護部	リハ部・看護部合同勉強会 「日常生活の中から移乗動作を振り返る」	訪問看護ステーション 門田早苗看護師 リハビリテーション部 黒川めぐみ副主任(P.T)、 飛地洋美副主任(OT)	40名	PT室
平成28年11月9日(水) 17:40～19:00	感染管理委員会	感染管理対策研修 「ノロウイルス対策～感染経路別予防策(接触感染)～」	大阪府済生会泉尾病院 感染管理認定看護師 田中ちよ氏	128名	5階ホール
平成28年11月25日(金) 18:00～19:00	リハ部・看護部	リハ部・看護部合同勉強会 「子どもたちのヒストリーを考えた愛護的関わり方の提案」	看護部 井ノ上智世師長 リハビリテーション部 今村健一主任(P.T)、木村基(OT)	40名	PT室
平成28年12月13日(火) 17:40～18:40	教育研修部	人権研修 「障害者差別解消法理解講座」	株式会社ミライロ 原口淳氏	105名	5階ホール
平成28年12月16日(金) 18:00～19:00	リハ部・看護部	リハ部・看護部合同勉強会 「頭のコントロールが難しい子の遊び方、介助の仕方」	ふたば リハビリテーション部 阪口和代主任(P.T)、松本あかね副主任(OT)	40名	PT室
平成28年12月20日(火) 17:40～18:40	褥瘡管理委員会	褥瘡研修 「褥瘡ケアの基本」	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 看護学科 講師 松田常美氏	48名	5階ホール
平成28年12月28日(水) 13:30～17:00	教育研修部	院内学会 発表 1)「病棟における口腔ケアと歯科衛生士の役割」 2)「フェニックスにおける短期集中リハシステムの取り組み ～適かつ効果的なセラピーの提供をめざして～」 3)「大阪発達総合療育センターで学んだこと ～Quality of life って何だろう?～」 4)「ゆうなぎ園の新たな取り組み ～人工内耳・重複クラス・リトミック～」 5)「利用者、そして自分自身を守るために ～反省をふまえた私たちの災害対策～」 6)「NMCS後方支援における人工呼吸装着児の 在宅移行事例～サポートブックでつながる継続支援～」 医療安全管理研修 「インシデント報告」 講演 「胃瘻に関するアンケートまとめ」	療育部歯科衛生科 三好穂乃香 岡田莉歩 リハビリテーション部 植野清香 木村智香 馬場新太郎 医務部 大阪市立大学医学部付属病院研修医 吉村仁志 ゆうなぎ園 東野祐基 池田聖子 熊井秀子 地域医療連携部訪問看護ステーション 熊田 綾 黒川めぐみ 地域医療連携部訪問看護ステーション 皆川かほり 看護部 梶原綾 友野博子 井ノ上智世 看護部(医療安全担当) 香月みよ子師長 看護部 牛尾実有紀主任	206名	5階ホール

イベントピックアップ

ゆうなぎ園クリスマス

ゆうなぎ園のクリスマス会です。
大きなサンタさんと年長・めづん組のちびサンタさんがやってきました。



ザ・リッツ・カールトン大阪クリスマス来院

今年もザ・リッツ・カールトン大阪からサンタさんがやってきました!バイオリンとピアノを聴きながらおいしいケーキをいただき、センター中に笑顔が溢れました。



なでしこバザー

10/19～25の期間で毎年恒例のなでしこバザーを開催しました。
愛情の詰まった利用者様の手作りコーナーに盛り出し物たっぷりのリサイクル品コーナーもあり大盛況でした。



感謝

大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

一般寄付金

月	寄付者(敬称略)	物品名
10月分	井上 明生 10月分楽基金 20件	本園
11月分	匿名 2件 フェニックス家族の会(クリスマス会の為) 11月分楽基金 4件	
12月分	匿名 1件 株万代(クリスマスプレゼント) 12月分楽基金 4件	
	港区民生委員児童委員協議会	あさしお園・ゆうなぎ園

寄付物品

月	寄付者(敬称略)	物品名
10月分	匿名 匿名	ソニー デジタルフォトフレーム まんが
11月分	匿名 匿名 聖家族の家	ハガキ 多数 椅子 勤労感謝の花
12月分	匿名 本多 優太 青島 明子 匿名	おもちゃ 本 お手玉 本



大阪発達総合療育センター

URL : <http://osaka-drc.jp>

南大阪小児リハビリテーション病院(保険医療機関)
フェニックス(医療型障がい児入所施設・療養介護事業・短期入所事業)
主として重症心身障がい児者
わかば(医療型障がい児入所施設・短期入所事業)主として肢体不自由児
ふたば(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業)主として肢体不自由児
いぶき(特定相談支援事業・障がい児相談支援事業)
なでしこ(生活介護事業・児童発達支援事業)

〒546-0035 東住吉区山坂5-11-21
TEL:06-6699-8731 FAX:06-6699-8134

発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会
発行責任者・梶浦一郎

訪問看護ステーション めぐみ(指定訪問看護事業)
TEL:06-6699-8855 FAX:06-6699-8856
ヘルパーステーション めぐみ(指定訪問介護事業)
TEL:06-7506-9223 FAX:06-6699-8856
〒546-0035 東住吉区山坂5-9-16

大阪発達総合療育センター あさしお診療所(保険医療機関)
あさしお園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として肢体不自由児
ゆうなぎ園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として難聴児

〒552-0004 港区夕曇2-5-3
TEL:06-6574-2521 FAX:06-6574-2524

